

## 飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

### 第55回 スーパーの親父への「ぼやき」

大企業が困った時は、株主、取引先はもちろん、銀行団、益しては金融庁や政府まで含めて、みんなで心配し、本気で潰さないよう右往左往しているようである。日本一大きなスーパーなんぞ、その典型で、毎日のように新聞紙上を賑やかしている。

大衆・庶民の末端で生きている小生など、その詳細事情なんて知る由もないが、もし潰れたら、その社会的影響も計り知れないほど、大きな問題になるのだろう。

でも、何か「変」?そんな「ボヤキ」を言いたくもなる。

本業に専念し、着実な利益を計上し、株主にも配当貢献を継続的に実践するのが、本来の経営者の務め...と教わってきた。このスーパーの経営者、関連多角化どころか、高度成長、バブル経済に浮かれ、「儲かるもんなら何ぼでもやりなされ」。経営者としての教養の欠片もなく、「我こそが、スーパーなり」と豪語してきた。スーパーの社長に徹すればまだしも、何を勘違いしたのか、評論家・コンサルタント気取りで、全国講演行脚、自分のスケール内で投資するなら兎も角、全て人の金で、見極めも出来ないまま、投資を繰り返してきた。...それを支え、また仕掛けたのは、優秀なる我国の大銀行と、利権に目がない政治屋と高級官僚達...。ここまで書くと、デバ亀シナリオによる三流映画になってしまう。

一民間企業の経営破綻の話が、冒頭のように、政府まで巻き込んでの奇怪なストーリーになっている由縁、あるいは自分たちの尻拭いに躍起になっていると見たほうが、いかにも現代日本の象徴的事案として、分かりやすいのかもしれない。

でももし、この経営者が中小企業だったら。銀行はただ回収を迫るだけで、支援はしない。政府、金融庁など、全く蚊帳の外、政治屋は「俺の知ったことか」と嘯くだけ。

永年かけてきた貯蓄性生命保険はとうに解約し、残るは死亡保険金のみ。会社の連帯保証人として、全財産を没収され、後は自己破産あるのみ。妻・子に被害が行かぬよう離縁し、妻の実家に帰ってしまう。僅かな土地屋敷も全て処分され、六帖一間のひなびたアパートへ、人目を避けるように引っ越した。それでも、何もしてあげられなかった、従業員とその家族へ、詫び続け、懺悔し続けて、誰も知らないうちに、ひっそりと生涯を閉じる。

大きな問題を含みつつも、社会的に、そして人間的に全てを否定されるのが、現代日本の、経営者の責任の取り方である。それだけ、経営責任は重いはずである。

中小企業の経営者の場合、多かれ少なかれ、こんな終焉を迎えた事例を、随分見てきた。...中小企業なんぞ、当然!...大企業の社会的影響度とは「雲泥の差」。一理はあるとは、その通りかもしれない。それにしても、冒頭の経営者や銀行団の責任とは、如何なるものなのか?いっぺん、思いっきりボヤいてみたかった。